

聖徳太子に学ぶ 白河支部 中村 恒夫

日本の歴史上で最も馴染みが深く、その姿を多くの絵画や彫刻に残す聖徳太子。

太子は、推古天皇の摂政として十七条憲法や冠位十二階を制定するとともに、遣唐使を派遣するなど、外交面でも大きな成果を残しました。また、当時の先進的な学問であった仏教を積極的に摂取し、みずから「三経義疏(さんぎょうぎしょ)」を著したのに加え、法隆寺や四天王寺など数多くの寺院を建立しました。こうしたことから、太子は日本仏教の礎を築いた人物として、後に宗派を超えて広く信仰されるようになります。

我が国における巨大建築物の造営は聖徳太子が発端ですから、太子は大工や木工職人の聖者「建築の守護神」また「大工の守護神」として崇拜され、太子薨去(こうきょ)ご命日の2月22日を特別な日として、太子講(聖徳太子を職能神とし信仰する同業の職人達が集まり太子像を祀り会合・飲食を行う)が営まれ、江戸時代には、左官、鍛冶、建具、桶屋と職種も広がっていきました。

白河建設組合でも年に一回の総会とは別に「太子講新年会」を行い、建設関係の職人や仲間との話し合いに花が咲きます。太子講は昭和25年以前から、白河市の大綱常瑞寺本堂で行われていましたが、昭和43年常瑞寺境内に建築組合の組合員や、建設関係の仲間の寄付で太子堂が建設されました。常瑞寺は浄土真宗本願寺派のお寺で「親鸞(しんらん)聖人(しょうにん)」の孫「如(にょ)信(しん)上人(しょうにん)」が開祖したお寺ですので歴史は古く、「親鸞(しんらん)聖人(しょうにん)」が彫ったと伝えられる木彫りの聖徳太子像があります。

私たちが思い描く太子は、唐本御影の肖像画で、高額紙幣や歴史教科書に描かれていました。1946年(昭和21年)2月に新円切り替えがおこなわれて以後、高額紙幣に4回モデルで登場します。百円札、千円札、五千元札、一万元札の4種類です。1946年(昭和21年) 百円札の発行から1984年(昭和59年) 壱万円札が福沢諭吉に、五千元札が新渡戸稲造に変わるまで高額紙幣としてあり続けました。最近では聖徳太子の影が薄くなっているように思うのは、お札から姿を消したからかもしれません。



聖徳太子が薨去(こうきょ)して千四百年が経とうとしていますが、太子の名前が現代においても、日本人のこころ深く認識されているのは、政治家聖徳太子の偉業がそうさせたばかりでなく「和国の教主」と表象されるように、時代を超えて日本人の教主としての存在があったといえます。十七条憲法の最後の条に「夫れ事独り断(さだ)むべからず。必ず衆(もろもろ)とともに宜しく論(あげつら)ふべし(略)」とあります。他人との交わりが希薄化しているこの時代「話し合って事を決めなさい」と聖徳太子は教えます。その教えを守って福島県リフォーム事業協同組合の活動、理事会、白河支部会を大切に考えたいと思っています。



「お墓を買う」福島支部 佐藤 正

正確に言うと、永代使用料というのだそうだ。それも毎年の管理料を5年間支払わないと、自動的に権利を失うとのこと、かなり厳しい決まりがあることも判明した。何時のころからか、夫婦の話題がお墓になりだした。毎日の食後に飲む薬の数と、血圧の話題がひとしきり済むと決まって、そろそろお墓の準備をという具合だ。

休みの日、思い立ったようにお墓ツアーを二人でしてみた。友人との話題に上ったことがある墓地へ出かけてみた。「宗派を問わず、駐車場完備です。しかも花と緑がいっぱいの、平坦墓苑です」、まるでそこに住むかのような、マンションを購入する様なキャッチコピーが書かれた看板を目安に訪れた。すると最近造成されたかのように整備された墓地で、日当たりのよい土地に整然と一定方向を向いて立派なお墓が並んでいて、素人目にも数百万はするなあど驚いたり、感心したりして見ていると、あることに気付いた。お墓が一定方向を向いて立っていることにだ。どういう事だろうと思ひながら考えていると、全て東を向いていることに気付いた。なるほどお墓の向きにも方角があるのかと思ひ乍ら、今度は交通の便と訪れる際の目印を考えてみた。平坦な田んぼの間に作られた墓地は、見晴らしは良いが道路の整備がされていないので、土地の人でないとなかなか迷うのではないかという事に気付いた。

そこでもう一つの墓地を訪れてみると、「宗派を問わず、交通が便利で駐車場完備です」と同じような言葉が並んでいた。ここには案内人の事務所があり、説明をお願いすると、「夫婦で来られる方は幸せですね」、という言葉が返ってきた。「大半が連れ合いを亡くしてからお見えになるので、毛玉の付いた様なセーターを着てお見えになりますよ」。さてどういう意味なのか、毛玉の付いたセーターは何を意味するのか考えながら、墓地を案内してもらおうと、整然と区画された墓地は、まるでマンションが林立するが如く、同じようなお墓が並び、隣同士の境界は3センチなのだそうだ。不思議な事にここでは背中合わせの区画になっているので、東側と西側ではお墓の売れ行きが格段に違い、東向きが圧倒的に人気なのだそうだ。従って価格も差があり、大いに迷う原因の一つである。

多くの方に墓地を購入する際の決め手を聞いてみると、「車でそばまで行けること、階段や坂道が少ないこと」が条件だそうだ。さて未だ我が家の墓地選びは続いているが、もう一つの心配は、お寺様をどこにするかという重大事が残っている。



数珠(もともとは数をかぞえる法具) 会津支部 新田 隆夫

葬儀や法事などに、お坊さんも檀信徒の方も「数珠(じゅず)」を身に着けます。数珠とは、珠(たま)に穴をあけ紐を通して輪の形にし、ふさを付けたものです。お坊さん用であれば一般的に珠は108個、檀信徒用であれば54個、36個、18個など、檀信徒用「念(ねん)珠(じゅ)」と呼ばれ数珠の材料は「木(もく)げん子(じ)」と云う木で作るのが優れていると伝えられています。現在では木の実、香木、天然石等で作られているものも多いようです。

数珠(じゅず)の機能ですが、名前の通り数をかぞえるために使いました。例として念仏の際、仏様の名前を何度も繰り返して唱える時、また数珠の珠同士をすり合わせ音がでるので、音を鳴らして供養を行い仏様やご先祖様の「みたま」に聞かせるようになりました。宗派によっては座禅時には持つてはならない数珠と持ったまま他人と対面することは無礼であるなどなど、通説の一つとして108個ある珠一つ一つを通すことで我々の煩惱が消えると云う話もございませぬ。(寺スクールより)

